

運転手まついさんとその時代

——文学史研究者が読む「定番教材」——

山本 一

1 冷房タクシーの登場

タクシー運転手「まついさん」を主人公とする、あまんきみこ作「白いぼうし」は、「定番教材」としての長きにわたって小学校国語科の教科書に掲載されてきた。まついさんのタクシーは、「変わることなく教科書の中を走り続けている」とも言えそうである。しかしはたしてそのタクシーは、どこか遠くの時間のない空想の国を走っているのだろうか。

「白いぼうし」の冒頭、客の紳士は汗を拭いている。本文には「夏がいきなりはじまったようなあつい日」と書かれている。しかし親切なはずのまついさんは、「冷房を入れましようか？」とは尋ねない。同じ単行本『車のいろは空のいろ』に収められた「すずかけ通り三丁目」では、季節は夏本番の七月、渋滞のために「車のなかはいっそうあつく」なっているのに、クーラー

は入らない。彼のタクシーにはカークーラーがついていないのである。そのことが不思議でない時代に、この作品は書かれ、その時代にの子どもたちに読まれた。その時代とはいつなのか？

「白いぼうし」の雑誌初出は一九六七年（昭和四二年）、まついさんが登場する最初の作品「くましんし」の初出は一九六五年（昭和四十年）である。もちろん、文学作品の発表時点がいつもそのまま作中の現在であるとは限らない。ただ、先に触れた「すずかけ通り三丁目」は、「二十二年まえのきょう」が昭和二十年七月の空襲の日だとされているので、作中現在は一九六七年（昭和四十二年）と特定できる。これらをふくむ八編の作品が単行本『車のいろは空のいろ』にまとめられるが、その初版は一九六八年である。これらのことから、八つの作品の現在、ほぼ一九六〇年代の半ばをやや過ぎた頃、年号で言えば昭和四十年代前半頃であろうと見当がつく。

偶然と言うべきか、一九六七年は、「冷房タクシー」の文字が新聞紙上をにぎわせる年であった。大阪府のタクシー業界が申請した冷房割増料金制を大阪陸運局が認可したことが社会問題となり、「国会でもはげしい論戦が交わされ」（七月二十日朝日新聞社説）たのである。関係の新聞報道を見ると、これより二年前に、同じ割増料金が福岡市で（ただし冷房を運転することに客が同意した場合にのみ適用される「選択制」として）導入されたが、ひと夏で廃止されたことが知られる。冷房車が走らなければこのような問題は起こりえないが、逆にすべてのタクシーに冷房がついているなら「割増料金」という発想もあり得ない。この騒ぎは、まさにこの年がタクシーの冷房車化のひとつの節目であったことを示している。じつは冷房タクシーは、はやくも一九五八年に東京都内で二十台が走り始めている（六月二〇日読売新聞朝刊七面「いずみ」欄）。しかし、普及が始まるのは六〇年代半ばの福岡市、名古屋市、そして大阪を含む関西都市圏においてであった。東京での冷房化加速が報じられたのは、大阪での騒動の翌年、一九六八年夏（八月十一日朝日新聞朝刊十六面東京版）で、その記事によれば三万台あまりのタクシーの八割に冷房がつき、前年の一割弱にくらべるとまさに爆発的な普及となったのである。

まついさんが車を走らせている町は特定のモデルを持たない

と思われるが、描かれているありさま（たとえば駅前の混雑、大学病院の存在、近郊の旅客用飛行場の存在、第二次世界大戦末期の空襲の目標となったことなど）から見て県庁所在地またはそれに続く程度の、中規模地方都市と見られる。一九六〇年代の半ば過ぎ、大都市で普及し始めた冷房タクシーは、まだ地方都市では一般的ではなかったのである。ちなみに、一九八六年刊『続車のいろは空のいろ』に収められた「しらないどうし」は、「すずかけ通り三丁目」同様に七月の空襲の記憶と関係があるが、この物語ではタクシーのクーラーに重要な意味が与えられている。作中現在には「三十三年まえのきょう、…三十機のB29が、…」とあることから昭和五十三年（一九七八年）と特定される。「白いぼうし」の約十年後であり、この間に、日本中どこでもタクシーのクーラーは説明不要のあたりまえの事になったのである。

タクシーの冷房のあるなしは、たとえば自動車そのものの普及に比べれば社会的な意味ははるかに小さい。しかし、人間の生活の具体的な細部と、その感覚的・心理的な印象に支えられる文学作品にとっては、生活の風景の変化はどうでもよい問題ではない（この点は、作品が写実的なリアリズムによるものかどうかとは関係がない）。そこで、もうすこし「まついさんの時代」にこだわってみたい。

2 タバコとレモン

単行本『車のいろは空のいろ』の時点で、まついさんは、ヘビーがつくかどうかはともかくスモーカーである。八編中三編にタバコを吸う場面がある（他に客だけが吸う場面が一編にある）。一九六〇年代には、子ども向けの読み物であっても、喫煙の場面を避けるという発想はなかった。むしろ、仕事をしている大人の描写として、休憩（小さなお客さん）や気持ちを落ち着けたい時（うんのいい話）にタバコを取り出すことは、ごく自然であった（ちなみに稿者・山本は一九六〇年代に学童期を過ごした者だが、当時は、親孝行やお手伝いのひとつとして「お父さんにタバコとマッチを持って行ってあげる」と子どもが答えていたという記憶がある）。伊佐山芳郎『嫌煙権を考える』（岩波新書、一九九九年）によれば、一九七〇年のWHO第二十三回総会でのリポート「喫煙と健康」が、「煙草問題への本格的取り組みの開始」のメルクマールであり、日本における禁煙運動の本格化はそれ以降のことである。はたして『続車のいろは空のいろ』（一九八六年）には喫煙場面はなく、まついさんがこの間に禁煙したらしいことが知られる。ただし、まついさんの健康にとっては嘉すべきことであろう。このように、価値観の変化に伴って、労働の風景の描かれ方が変貌した

のである。

次にくだものについて見よう。「白いぼうし」では、まついさんの実家から届いた夏蜜柑の香りが、重要な役割を果たしているが、作品の冒頭で客の紳士はこれを「レモンのおいですか？」と尋ねている。レモンについて、一九六八年（昭和四三年）版『日本農業年鑑』に掲載されている「果実の輸入実績」表（一六六頁）の説明には、次のようにある。

レモンの輸入も、三九年五月に自由化されて以来急増し、四一年は二万三二〇トンの輸入で前年の二倍、三八年の八・五倍に増加した。

この頃から、日本の農業政策は関税による保護から輸入自由化に転換しつつあり、その大きな影響を受けたのが柑橘栽培であった。ちなみに、平成十年度のレモン輸入量は八万四千トンから九万一千トンの間であり、昭和四十一年の四倍弱であるから、なお昭和四十年代には現在のわれわれにとって程レモンはありきたりでなかったとも言える。ただし、このような統計数字から生活感覚を類推することは危険が伴う。心象のリアリティの「質」は客観的数値の「量」に直接対応しないからである。それを承知であえていささか推測すれば、レモンが「舶来高級」品から平凡な果実へと変貌するのがおよそ六十年代の半ばであり、客の紳士はその転換点に立っているように思われる。すな

わち、彼にとつては夏蜜柑よりはレモンの方がなじみのある果実なのだが、同時におそらく、夏蜜柑ですかと言わずにレモンですかと聞くと同時に、多少の銜いもあったのではなからうか。

なお、『車のいろは空のいろ』の出版後の一九七一年、グレープフルーツが自由化され、競合する夏蜜柑の栽培に大きな打撃を与えることになる。自由化までは「アメリカにしかない珍しい果物」であつたグレープフルーツは、以後、大衆的な商品へと変貌していく（ちなみに一九六四年・昭和三十九年に発表された大江健三郎『個人的な体験』8節に登場するグレープフルーツは自由化以前の果物である）。ただし、グレープフルーツと競合した夏蜜柑栽培は、既にいわゆる「甘夏」に品種転換を行つており、以後も新品種によつて輸入柑橘に対抗していくことになるが、まっいさんの夏蜜柑は、察するところおそらく酸味の強い伝統的な品種であらう（ちなみに稿者・山本は、幼児期にある親族の家で、冷やした夏蜜柑の果実に砂糖と酸を中和するための重曹をまぶしたものを、おやつとして出された記憶がある）。まっいさんの実家の夏蜜柑は、おそらく自家消費用に家の近くに植えられている樹で、商品として栽培しているわけではなからう。作品以後に、まっいさんの実家が自由化の波をかぶつたであらうと心配する必要はなさそうである。

3 離農と団地

とはいえ、農産物輸入の自由化に象徴される、近代化にともなう都市と農村の変貌は、一九六〇年代という時代のもっとも大きな事象のひとつであつた。

大川健嗣によれば、「東京・大阪・名古屋などの労働市場に向けて、毎年四〇―五〇万人代の人口が地方から三大都市に流出して行つた。そのピークは、約六五万人を記録した一九六一、二（昭和三十六、七）年であつた」（日本村落研究学会編『日本農業・農村の史的展開と農政 第二次世界大戦後を中心に／【年報】村落社会研究―37― 農山漁村文化協会二〇〇一年年十一月）。同じ文献からさらに引用する。

……こうした動きは、前述の一九五〇年代末に始まつた新規学卒の若年労働力をはじめ、農家の次三男（女）層といった、戦後長らく農山村に滞留していた、いわゆる相対的過剰人口の大量流出時代と較べるとかなり質的な変化が見られる。すなわち、新規学卒者の流出は従来どおりであつたが、一九六〇年代半ば頃になると、西日本においては田畑や家屋敷までも処分して離村するという、いわゆる「挙家離村型」の人口流出というきわめてドラスティックな人口流出が一般化するようになり、他方、東北地方や北陸地方などの

ような東日本の稲作単作地帯に見られるように、…(中略)

「出稼ぎ型」 人口流出が、これまた一般化するに至った。

「白いぼうし」の時代は、このような農村人口の都市への流出の時代にほかならない。そして、まっついさん自身も、「小さなお客さん」に「いなかから、この町に…もう三年」、「ずっとけ通り三丁目」に「三年も運転手をしている」とあるように、昭和三十九年(一九六四年)頃の春に農村部から都市に出てきた「流出人口」であった。

もちろん、まっついさんの場合は、大川が取り上げたような典型的なケースとは異なる。「すずかけ通り三丁目」によれば、まっついさんには弟がいる。弟が農家を継いでいるかどうかは判らない。「ごろう」という名前からすれば、長男ではないかもしれないが、兄がいるかどうかははっきり判らない。可能性としては、多くの男兄弟のうち誰かが農業を営み、彼を含む兄弟たちはそれぞれ都会に出ているのかも知れない。いずれにせよ、「白いぼうし」から母親が田舎にすることは間違いないので、「挙家離村型」ではない。季節にかかわらず都会に住んでいるようなので、「出稼ぎ型」でもない。むしろ、大川が少し前の時代のタイプとして示している「いわゆる相対的過剰人口の」流出に近い可能性がある。この点を踏まえた上で、それでもなお、まっついさんが広い意味で、農村部から都市部への労働人口

の大移動という時代の波の一角にすることに注意する必要がある。そのこの意味は後に論じる。

都市部の人口の増大は、都市の環境と景観にも変化をもたらした。そのことを象徴的に示すのが都市近郊に出現した鉄筋コンクリートづくりの集合住宅群、いわゆる「団地」である。日本住宅公団などの後身組織である独立行政法人都市再生機構(UR都市機構)のホームページによれば、一九六三年(昭和三十八年)全国統一標準設計(63型)が始まり、その翌年に大阪府の千里ニュータウン入居が始まる。一九六五年には公団住宅の浴室にローラー浴槽が採用され、同じ年に多摩ニュータウンと泉北ニュータウンの開発計画が決定している。まっついさんのタクシーが走っている時代は、団地の建設と普及の時代でもあったと言つてよい。

「白いぼうし」の最後の場面は、まさに「小さな団地の前の小さな野原」なのだが、その景観を具体的に示すのは、蝶の化身とおぼしい女の子が口にする「いっててもいいかも、しかしいたてものばかりだもん。」ということばであろう。このことばは、ビル化の進んだ街全体に対するものと解してもさしつかえないが、団地に対してこそ最もよく当てはまる。特に公営の公団住宅は、一戸の設計が全国一律化されるとともに、各団地の棟の設計(階や一棟に入る戸数)も公平に均一化され、日照を

確保するために各棟はおおむね同一方向に並行して建てられた。それらは、女の子のこぼれおぼり「画一的」な印象を与えるが、反面では秩序だった近代的な都市景観の典型としても受け取られた。日本住宅公団が一九六五年に刊行した『日本住宅公団十年史』は、巻頭に一一〇頁にも及ぶカラーおよびモノクロの写真掲げ、各地の団地の風景を紹介しているが、その含意は新しい都市の景観美を示すことであつたと思われる。写真頁のそこかしこに加えられたキャプションのいくつかは、そういう意味においてきわめて興味深いので引用しておきたい。

団地は計画的につくられた街である。附近の街並とは一見不調和のような感じを与えるかもしれない。その不調和が消えるとき、新しい日本人の生活が生きてくるだろう。

(七三頁)

いまや団地というものは都市生活を代表する概念となつてきた。団地のたたずまいが、都市のなかでの新しい美しさをつくりあげてゆく。(七八頁)

永い間、私たちの生活に親しんできた木造住宅に代わつて、鉄筋コンクリート造りの住宅が私たちの生活に入ってきた。新しい住宅が、新しい日本人の生活を作りあげてゆく。(一一〇頁)

もちろんこれは、団地建設を進める側のプロパガンダである。

けれども、それを当時の庶民感覚から遊離した空疎なキャッチコピーにすぎないと見るのは一面的であろう。明治以降の日本国家が紆余曲折を繰り返して進めてきた、近代化の最終局面が六〇年代には訪れつつあつた。近代化には必ず正負の評価があるとして、正の評価を端的に表現するのがこれらのキャプションだと言える。火災にも震災にも弱い木造住宅からの脱却、混乱した開発がもたらす無秩序な都市景観への対抗、増大する都市勤労者人口に対する均質で近代的な住居の提供、そのような「団地」の正の側面を無視して、六〇年代の日本は理解できない(なお、団地のに対する意識の正負の両義性については、磯田光一『戦後史の空間』(新潮社、一九八三年、のち新潮文庫に収録)所収の「住居感覚のディレンマ」が興味深い分析を行っている)。

4 時代と作品

作者あまんきみこは、まついさんシリーズを書き始めるに当たって、彼の性格・年齢・経歴そのほかをあらかじめ精密に設定しなかったと述懐している(日本児童文学協会編『作家が語るわたしの児童文学15人』につけん教育出版社、二〇〇二年)。むしろ、まついさんは、作者の視点から、乗客たちを迎え入れ、見

める存在であつたようだ。この述懐は尊重されるべきであらう。

本稿で私はまっついさんの閨歴とその時代背景を追求してきたが、それは決して、作者が意図的に「時代」を描いていると考へたからではない。むしろ、作者の意図（作者によつて主観的に考へられた意図）とは別に、なかば無意識に『車のいろは空のいろ』に色濃く投影された「時代」について、あえて野暮な詮索を進めてみたのである。その時代とは、簡単に言つてしまへば、社会構造の都市化が大きく進展した時代である。多くの日本人が、本来の生活から切り離され、新しいより人工的な環境の中で暮らすことを余儀なくされていた。彼等自身はもとより、本来の都会居住者も、「田舎」が変貌し都市が膨張することに対して、経済と社会が発展し、生活が便利になるという希望を見出す一方で、何かが失われていくという悲哀と郷愁を抱いていたと思われる。作者もまた、そのような哀惜と郷愁を時代と共有していた。『車のいろは空のいろ』に登場する動物たち、あるいは人物たちは、多くの場合、このような郷愁の具象化である。より正確に言えば、失われゆくものが、実は失われることなく、私どものすぐ近くにひっそりと生き延びていくれることを願う、作者の願望の具象化である。

「くましんし」や「やまねこせんせい」、タヌキの子ども、迷子になつたモンシロチョウたちは、もちろん離農農民そのも

のではないし、そのアレゴリカルな置き換えでさえもない。けれども、近代化の波に追われて故郷を離れ、都会で定着しようと辛苦を重ねている離農農民とメンタリティーにおいて重なる存在である。そして、まっついさん自身は広い意味での彼等の仲間であり、彼等と共感する存在である。「ほん日は雪天なり」が端的に示すように、彼等の方もそのことを知つていて、まっついさんの前では安心して正体を現すのである。

年表的には一九六〇年代に既に、公害を始めとする近代化・都市化の負の側面は部分的に顕在化し始めていた。しかし、多くの人々の意識の表面にはむしろその正の側面、進歩の側面が強く映つていたと見てよい。時代意識の表層には現れないが、底の方には確かに流れている哀惜の感情を、「願い」の形で表象したところにこそ『車のいろは空のいろ』の世界が放つ言ひしれぬ魅力のみなもとがあつたと言える。「すずかけ通り三丁目」でさえも、そのほんとうのモチーフは、失われた戦前の生活の懐かしさであらう。

やや主観的な評価になるが、私は『続車のいろは空のいろ』以下の続編をあまり高く評価しない。これらの諸編が書かれるまでの間に、近代化はいわば反省期に入り、ひとびとは自然環境の重要性や消費中心の経済の矛盾、あるいは都市と農漁村のバランスの問題をしだいに強く意識するようになった。そのこ

とは、まっさいさんとその乗客が表象するものの意味を、ありきたりなモチーフに変えていく方向に作用した。「ぼたるのゆめ」は、自然環境の復元を扱っている。「まよなかのお客さん」は使い捨ての文化への批判を含んでいる。「しらないどうし」は戦争体験の風化への危惧を描いている。しかし、それらの作の思想的なわかりやすさは、作品に力を与えているとは思われない。その理由は、(よくそう言われるように、文学的表現がもつばら心理や情緒に関わるからではなく、文学作品を支える「思想」が、時代の深層から身体感覚によって汲み上げられるべきものだからである。

では、今やほかなかな昔となった六〇年代後半の心性を湛える「白いぼうし」そのほかの作品群が、現代の私たちをなお引きつける理由は何なのであろうか。あるいは、その魅力は今後もあせないものであろうか。この問いは、どうやら、ギリシア文学についてのカール・マルクスのよく知られた問い(『経済学批判要綱序説』に似てきてしまったようである。さしあたり次のように答えておこう。私たちが、私たちなりに「失われたもの」への郷愁を心に抱いている限り、そして、その郷愁の対象が私たちのかたわらでひっそり生き延びてくれたらという不可能な夢を捨てきれない限り、おそらく「白いぼうし」は読者を持ち続けるであらう、と。

(付記) 本稿は、二〇〇六年一月六日「金沢大学教育学部国語国文学会」において口頭発表した内容をもとに、改訂・増補を加えたものである。当日ご清聴いただき、ご意見等を下さった皆様に感謝申し上げます。冷房タクシーに関する新聞記事の検索には、「読売新聞昭和戦後期誌面検索システム」〔聞蔵〕朝日新聞記事全文検索システム〕等の検索システムを利用した。〔作者によつて〕主観的に考えられた意図〕はマックス・ウェーバーの理解社会学の用語(『理解社会学のカテゴリ』一九一七年など)のもじりであるが、そのことに深い意味はない。「白いぼうし」等の作品の引用は、あえて手近な最新の版(ポプラポケット文庫版、ポプラ社、二〇〇五年)によつた。初版単行本とそれ以後のたびたびの改版の間には改訂による細かな語句の異同があり、そこにも時代の変貌が明らかに窺える。しかし、その意味を説明するには初出誌を含めた書誌学的な検討と、通常の本文批評の方法とは異なる語彙的な分析が必要となる。データ調査が及んでいないことの他に、本稿とは全く異なる考察枠組みが必要になることもあり、本稿では本文異同の問題には触れないこととした。

(本学教員)